
Piece to Peace

パウリの罫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P i e c e t o P e a c e

【Nコード】

N 9 1 8 8 Z

【作者名】

パウリの甥

【あらすじ】

一人の麗しき女性を巡って四人の男たちが踊る悲喜劇・・・

感情では足りなくて、理性では語れなくて、本能では知ることのできない・・・何が正しく、どうしたら赦されるのだろうか？

本作品は志保さんを中心にした逆ハーレム(?)なお話です・・・このような設定、もしくはキャラクターの描き方が受け入れられな

いかたはまわれ右を推奨します・
・
・

S c e n e 1. 0 : 現と夢（前書き）

勢いで書いてしまった連載ものです・・・こんな作品を読んで頂き有難うございます・・・ただし、作者が筋を確定していないのでどんな物語になるかは皆さんのご意見や感想等で大きく変わるかもしれません・・・

では、どうぞ！！

Scene 1. 0. 現と夢

”桜の花びらが吹雪のように舞う中で、僕は彼女に恋をした・・・”

”それは、世界の理をいやそんなものではない自分の価値観そのものが揺らいでしまうぐらいのものだった・・・”

”月並みの言葉しか思い浮かばない・・・けど、彼女の為になら何もかも捨ててしまってもかまわないとそう思ったんだ・・・”

”世の無情さを知り、日々のモノな生活に浸るとそんな理想などケーキの上にまぶしたパウダーシュガーのように儚く、またほんの少しの因子で崩れ消え去るものだ・・・ならば、己を大事にし己の為に生きるのが賢く、また利になっっている。”

なら、声を大にして叫ぼう・・・彼女が僕にとっての”世界”であり、全・・・

「あら、新しい作品の下書きかしら？あなたにしてみたら、随分

と可愛らしくて素直な文章ね・・・」

女はいつの間にか、俺の後ろに来ていたようだ・・・こういう気配を消すところや皮肉をいうところは最初はあまり好きではなかった・・・ただ、時を重ねるうちにそこすらも愛おしいと思ってくるのは何の幻覚作用なのだろうか？そうして思わせぶりな態度を口調の端々に込めて、柔らかく甘美なそれでも行く先は生き地獄・・・ともいうべき白き肢体を俺に擦り付ける・・・媚びるように、または俺を憐れむように・・・

とある大都市の繁華街に君臨する、翡翠の女王・・・人は彼女のことをこう云う。まるで、この世の男は自分の為にありそれは一重に奉仕するだけの存在・・・と言わんばかりの不遜で、高飛車で・・・けどそこには高貴と、怜悧が相まって・・・単なる女の粹を超えている、ある意味規格外な人間だ・・・

その容姿に惹きつけられる奴が大半だが、中にはこのどうしようにもならない性格が好きな輩もいるようだ・・・

そういえば、同じ作家仲間の服部は

「あの、どうしようもないぐらいのツンデレぶりがええねん？わかるかあゝ平成のコナン・ドイルさん？」

そもそも、同じ推理小説家のクセして「最近、売れ筋がエエから

のう」の一言でラノベ作家に転向しやがったアイツは殊、ツンデレやらヤンデレやらと女性を何かの型にはめようとしている・・・これも、奥さんに先立たれてしまい男手一つで息子を養わないといけないからなのだろうか・・・

昔は、小説家の大家でもある父親を超えてやると息巻いており一心不乱に作品を書いているうちはよかった・・・ただ、父親を病で亡くしてから目標と目的を失い酒量も増え自棄になる一方・・・それでも、奥さんの和葉さんとは上手くいっていたようだが生来、身体が弱かった彼女は一人息子を産み落とすと残されていたこの色黒男を心配するように世を去って行った・・・

それから、件の歓楽街に繰り出し色々悪い噂が絶えない中その「彼女」に出逢ったそうだ・・・

それから、崩れるのはいとも簡単だったそうで・・・と”彼女”は事も無げに語った・・・

俺は、最初は服部をそそのかしたのはこのオンナのせいだと決めていた・・・確かに、酒におぼれ誇りも夢も失いはしたがけど自分の信念を捨てるはずがないと思うていた・・・

なので、俺は单身あのオンナの”拠点”に向かっていったのだ・・・

きで、
どうくん
起きて、

7

るのではというぐらい光がこぼれている・・・

・・・夢？・・・

「起きなさい、工藤君？今日は初日でしょ、脚本家がいなければ舞台はご破算になるわよ・・・」

「翡翠の・・・女王・・・」

「は？何寝ぼけているの工藤君？それとも、頭の中はもう仕事モードな訳？江戸川センセイ？」

「あついや・・・済まない少し寝ぼけていたんだ・・・志保・・・」

「ちょっと、昔馴染だからっていつてファーストネームやめてくれるかしら？それに今は何もないでしょう？工藤君・・・」

「っあああ・・・昨日は夜遅くまで有難うな・・・若手実力派女優さんの意見も聴けてよかったよ」

そう、彼女・・・宮野志保。芸名、灰原哀。モデルから始まって、その容姿と見る者を惹きつける雰囲気と卓越した演技力で既に二十代初めで実力派女優の仲間入りをしている・・・その他を圧倒するオーラと理的でかつ聡明な眼差しから彼女のことを「翡翠の女

帝」や「極東の至宝」と・・・まあ、有りがちな表現では足りないぐらいの通り名や惜しめない賛辞が与えられている・・・

そして、オレにとっての初めての女性たいせつなひとだったし初めての相手でもあり・・・これから変わることはないだろう・・・

オレ、工藤新一と宮野志保、そして高校の同級生だった黒羽快斗、大学の演研で知り合った服部平次は昔からの俳優仲間だった。ただ、オレ一人演劇の才に恵まれなかったこともあり今は脚本家でなんとかこの世界に残っている・・・

ただ、オレが俳優をあきらめ脚本家になって暫くして志保との距離は遠のいていった・・・今では脚本家と女優という細い繋がりだけ・・・

P i e c e t o P e a c e — S c e n e 1. 0 .. 現と夢

I m i t a t i o n t o T r u t h

この前の打ち上げもそうだったが先の二人に加え、二世俳優の白馬なんとかというやつも彼女のことを虎視眈々に狙っていた・・・共演者しかもヒロインとその相手役ということもあり確かに、二人が会話をし微笑み合っている姿は「様になっている」し、誰からみてもお似合いな二人でもあった・・・

「ほんと、白馬のヤロー！あんなに志保ちゃんべったりで・・・」
「なら、お前がアタックすればええのに？のう、工藤？お前からなんかないや・・・」

「しらねえし、興味もねえ・・・そもそも、オレはアイツのモノでも無ければ、アイツはオレのモノでもねえーし・・・そもそも、雛森代議士の娘に手だしたお前が言えてギリかよ？デキちまったんだろ？」

「そうそう、聴いてよねえ新ちゃん……それがさ、見てよこれかわいいd」

「先も言ったが、こんなモノクロ写真でわかるか？そもそも、まだ生まれてもないのに言えるか！」

「新ちゃんのいじわる！？……けどさ、新一……お前はそれでいいの？」

「そうやで……このままだとオレがアタックしてまうで？それでええのん？」

似たような顔立ちの男が、オレを諭すように言う……分かってるさ、そんなこと……けどオレの一方通行^{おもい}だけではだめだろう……
・・彼女^{しほ}も呼んでくれないと……

．．．．．けど、オレはあの時．．．．．

．．．．．志保の一方通行をはねつけてしまった．．．．．
おもい

「．．．いいんだよ、別に．．．」

新一はグラスに残っていたカクテルを空虚な胃に無理やり流し込んだ。アルコールと酸味の利いた風味が胃を刺激する。この嘔吐感

や胸やけは果たして、生理的なものだけなのか？それとも、・・・

胸に去来する何とも言えない想いを酒精と快楽で塗りつぶせたら
どれだけ楽になれるか・・・

答の見つからない、不毛で虚しい自問自答に蓋をしてラウンジのガラスに映る人工のランタンの灯りをただ見つめるだけであった・・・

「志保さん、今晚はどうです？この後、いい感じのバーがあるのですが、一緒に来られますか？」

「白馬君にしては、安易でストレートな誘いね？いいのかしら？結構、イける口よ、私？」

軽くウェーブのかかった赤茶けた髪をさっと指に絡ませて後ろへ流

す……さりげない所作にも優雅で気品が溢れていて……昔のあの人を彷彿とさせてくれる……やはり、彼女は僕にとっての・

白馬探が彼女と出会ったのは映画作品での共演だった……自分は、志保の恋人の恋敵役を演じたのだ……その演技が認められその年の映画賞の賞という賞を独占し、二世俳優という偏見じみたレッテルをも覆したのだ。ただ、白馬自身はよく自覚していた……それは、あの時の素の自分をありのままに見せただけで演技などというものとは遠いものだったということを……

過去に縛られるのも悪くはない……いや、今も僕は引き摺っている……けど、今はこの状況に身を委ねたい……

それが、たった一時の安らぎであっても、彼女に向けているものが愛情ではなく哀情であるということ……

秀麗な目をつぶり、今浮かんだ考えを瞬時に消し去ると笑みを向ける……聡明な彼女にはすでに気付かれているかもしれない。偽りの思慕、偽りの眼差し、偽りの微笑……それでも、いい。

僕は、道化師・・・操り手は自らの感情・・・その
役は深い哀情・・・

それから、志保と白馬が交際していることが大衆紙に載ったのはそ
れから三日後のことだった・・・

人間、習慣づいてしまったことは判を押したが如くそこには感情の余地も一切いれずただ黙々とこなすことができる。例え、寂寥感に満たされても焦燥感にかられようとも社会という大帝に奉仕する従者となり今日も与えられた仕事を消化する……

そこに生きる価値を見いだせる人もいる……ただ、それはほんの選ばれた人間にしか過ぎない……やはり、大半はモノな世界に飽き、悩み、絶望し最後は思考を失う……

果たしてこの男は何を思って今洗顔をし、思い人でもそうでもない人間の作る朝食にありつこうとしているのだろうか……それは、過去の陰惨な経験なのかそれとも取るに足らない砂上の虚栄心なのか……

穏やかな朝日の中、ダイニングには煎ったコーヒー豆の芳醇な香り、トーストの香ばしい匂い、フライパンの上をはぜる水分の音で充満

している・・・男は、テーブルの上を一瞥する。昨夜あったはずの大量の資料と校正したての脚本の山、仕事道具でもあり彼女から贈ってもらった唯一の品であるヤード・オ・レッドの万年筆がどこへいったかと一瞬驚いたようだっただが、

「仕事道具なら、あなたの仕事机に置いといたわ。それと、昨夜の議論はちゃんとまとめといたから。ちゃんと目を通しておいてよね。それより、早く朝食を食べて頂戴。本当に遅刻するわよ。」

こうも、自分の足りないところをさりげなくフォローもしてくれるそれにそつ無く何事でもこなせる・・・まるで、自分の欠けた半身であるかのように必要な彼女・・・でも、

「そろそろ、あなたもアシスタントを雇ったら？そこそこ有名にもなったんだし・・・」

彼女は呼ばない・・・その声も霧散して意味をなさない・・・どうして、アイツなんだよ・・・

「もし、必要なら私から紹介するけどー」「オイ、どういふつもりだよ？」——工藤君？」

「どうしてなんだよ？なんで、オレの名前を呼ばないんだよ!!オレはここににいるのに——「違うわ!!」——志保・・・？」

気が付いていたらオレは志保の手を思いつきり掴んでいた・・・
白くて陶磁器の様な肌・・・そして小枝細工のように精緻ではかな
く壊れそうなほどの腕を・・・そこは見る見るうちに紅くうっ血
する・・・まるで、己の存在を自己主張せんがために・・・それで
も、分かっていてオレはやめなかった
・・・

「・・・あなたは、変わった・・・それがまだ分からないの
？」

けど、オレが大事にしたいアイツは・・・泣きもせず唯じっとオ
レを見つめていた・・・

その瞳には、怒りの感情とも悲しみの感情とでもなく・・・ただ、
独り考え苦しみ抱え込もうとしている眼だった・・・

「・・・朝食、冷めないうちに食べて・・・アシスタントの件は
私が妃先生を介して紹介しておくから・・・」

気が付いていたら、コーヒーの湯気も消え去り温かみがある白い印象派絵画もどす黒い陰惨とする前衛芸術へと変貌していた・・・それに一瞥をしたため息をするとデスクに整頓された資料を無造作につかみ黒革のくたびれ鞆に詰め込んだ・・・

そして、オレの気持ちをゴ丁寧に代弁した冬の寒空のもと飛び出したいった・・・

Scene 1. 0.: 現と夢（後書き）

前作に引き続き、またもや見切り発進で．．．自分の馬鹿さ加減にほとほと呆れるばかりです．．．

ほのぼのからいきなりのダークシリアス、そこに鬱をトッピングした感じに．．．

したい、と思っています．．．

さてどうなることやら？作者である自分が一番緊張感なく、責任感が無いかもしれない．．．

ご意見・ご感想等たくさん待ってまーす！！

S c e n e 2 . 0 : 墮落 現状維持（前書き）

あーなんか色々やってしまったので取りあえずごめんなさい・・・

Scene 2.0: 墮落 現状維持

固結び・・・という言葉があるように一度結びついた紐同士は、簡単に解けない・・・

結び方には秩序は無く、想いも一方通行・・・けど、大きな力が加わることが無ければ決して解けることは無い・・・

二人の想いを邪魔するものなどはなく、そこにあるのは絡まって解けないという泥沼な状況だけ・・・

外から見れば、そんな姿は淀み腐りきったものでもあり忌避すべき対象である・・・

でも、バクテリアも存在しない清らかな流れには生物は棲みつかない・・・

生きるものの全てが、他の存在と共存し依存して絶妙なバランスと多様性を生み出す・・・

人間関係にも清らかなものはない・・・もしあるなら、それは”繋がって”いるという体のいい蜃気楼を見ているにしか過ぎない・・・

今の状況を打破するのか、それとも水を抜いて心中するのか・・・

・ 案外、この状況は俺にとったら都合のいいことなのかもしれない・・・

P i e c e t o P e a c e — S c e n e 2 . 0 .. 墮落 現
状維持

t e n s e t o r e s t



静かでそれでも温かな着信音になる・・・”彼女”をイメージ
した曲だ・・・

「あつ、着信ですよ江戸川先生？」

「・・・うん、そうだな・・・」

憂鬱と倦怠感がのどの奥で引っかかり何ともいえない不快感を醸し
出していた今日この頃

そんな中、彼女からのメールを受け取ったのは打ち合わせに向かう
車内の中だった・・・

あの朝から二週間・・・お互い、急がしいということもあり顔を合わせることは滅多に無かった。いや、正確に言うならば自分がこのぬるま湯からほど遠いそれでもどこか安心感と虚像の充足感を与えていたこの環境を崩したくなかったのだろう・・・

今、彼女と顔を合わせてしまったらこの関係にも終焉が来るかもしれない・・・

そう、糸のように細くそして先行きなどはるか彼方で霞んで見えないような確率にさえも縋ることはできなくなってしまう・・・

所詮、オレはあの時から何も変わっちゃいねえ・・・

運命からも、真実からも・・・逃げっぱっかだ・・・

ひとり、結末にならない問答がループしていると運転席の彼女がオレに顔を向けてきた・・・

「どうしたんですか？演劇界きつてのホープ、江戸川先生が暗い顔なんてねえ？」

「別に？それより、前の上がったト書きはできたの、まーくん？」

「・・・先生、まさかボク^{ボク}っ娘を馬鹿にしないかい？」

「別に、貴重なサンプルとして重宝してもらっているよ・・・世良真純くん？」

「ほーら、馬鹿にしている！！やっぱり変な目でみている、こーの工藤君のばあーか」

と、傍目活発で快活な少年・・・いや、ボーイッシュな”彼女”は左手で巧みにハンドルを捌きながら右手で男を器用に殴る・・・見事な正拳突きだ・・・

しかし、男はそんな和氣藹々^{かげき}なやり取りにも慣れているのだろう絶妙な角度から放たれた拳をいとも簡単に交わす・・・しかし、

「スキありっ！！」

いつの間に左手が、いや憤怒の左拳が男の側面を正確に捉えていた・・・

「Oh・・・・・・・・少し、やり過ぎちゃったかな？」

男、工藤新一・・・・・・・・今日の恋愛運もとい女性運はダントツのワーストのようだ・・・・・

「・・・・・・・・っうううう、天地が揺れる。」

「悪かったって言ってるじゃないですか・・・・・・・・その、シンイチ・・・・・・・・」

今まで、快活だった彼女もシュンと頭垂れどこかいじらしさを感じさせるものになっていた。その証拠に涙も心なしか潤んでいて、上

目遣いになっている・・・まるで捨てられた子犬そのものだ・・・

（いつ、こんなスキルを身につけたんだ？・・・誰だ？シュウさんか？）

男は、つい最近まで妹のように接してきた彼女にどこか感じていた・・・

それは、仄かに薫る”オンナ”でもありどこか似ている”影”と”妖艶”でもあった。

彼女・・・世良真純は文才に優れた新一公認の”非公式な”アシスタントだった・・・

非公式なのは彼女がまだ未成年（大学一年生）であること、そして自分の母親の遠縁にあたる人間でもあった・・・

勿論、このことを知るのは母親と自分、そして彼女の唯一の肉親である売れないクマだらけの俳優だ（シュウ）・・・

彼女でさえ、知らない・・・

いつの間にか、彼女はコーヒー缶片手にオレに枝垂れかかり腕をオレの首に回していた・・・そうして瞳がかち合う。彼女の瞳を翡翠やエメラルドに例えるならコイツのはベリルだ・・・自ら光ることもあれば、外の光でも感化し吸収し輝く両目・・・

「さっきの着信、志保さんでしょ？」

「・・・・・・・・」

途端に体が僅かだけだが硬直する。足の裏が強力な接着剤、いや特殊なコンクリートによって固められ抜け出すことができないみたいだ・・・

粘着質で、その裏にはそこはかとなく背徳感と禁忌を感じとれる・・・

「・・・なんで、いつも心ここにあらずなのかなあ？」

「別に・・・」

真純は全てを知って、それでも工藤新一に惹かれていた・・・ただ、肉体は成長しても心の成長は追いつかない・・・でも何とかして彼を振り向かせたかった・・・

触れ合いも繋がりも、遊びでもいい・・・けど、一緒に同じときを過ごしたい・・・

それが、彼女の想いでもあり願いでもある。・・・そしてそれは、存在意義にも等しい程のもの・・・それだけに工藤新一という存在に依存していた。

「・・・ねえ、今日はダメ？」

「仕事がある・・・それに・・・」

「仕事は編集者との打ち合わせとチェックだけ・・・そんなもの二時間もあれば終わるでしょ？」

媚びるようにでもそこにはただ真っ直ぐな眼差し（おもい）しかなくて、

「それとも、何か予定があるのかい？くどーくーん？暖めてくれないかなあ？」

「・・・勝手にしろ・・・」

飲みかけの冷めたホットレモンを飲もうとする前に、彼女の形のいい花卉に呼吸を奪われた・・・

今夜は雪になりそうだ・・・そう、雲行きから、外の空気から、雰囲気から・・・全身で、五感で季節を、冬を感じていた。

色黒の男・・・もとい服部平次は台本と睨めっこしていた。今度のドラマのセリフに悪戦苦闘をしていた。それは、現代劇でありしかもセリフは標準語であったのだ。

「あーっこうも東京弁はこないに難しいんや！！ホンマ、頭がどうにかなくなってしまいそうや！！」

とんがり頭の後頭部をガシガシ搔き筆ると、猪口に残った温くなった熱爛に一瞥をやり遠い目で窓辺に映る風景を眺めていた。

元々、若手では珍しく殺陣や作法の素養があった服部はデビューしてから専ら時代劇や大河ドラマといった物に出演していた。

芸が古臭い・・・いや、古風で男臭い雰囲気相まって昨今人気の高い、草食系美男子（快斗くんみたいなヤツ・・・あああ、ファンの皆様物投げないで！！）とは違った”サムライ系”のイケメンとして人気が高いのであった・・・

なので、どういう訳か現代劇とりわけトレンドイドラマみたいな類

は苦手であった。その上にこの男、恋愛経験ゼロ……なので感情移入どころか全て「アホくさ」と片付けてしまう……。彼の考えとしては、男女の関係やその他諸々を語るには理屈が通用しない。況してやそのほとんどが感情論になりがちで曖昧で不透明。まあ、法にそして道義に反しなければいいのではと思うくらいで、けどその為に自らの社氣的立場や私財を投げ打ってしまうまでの心意義が理解できない……。そういうことらしい。

（口では、工藤にあんなことやこんなことゆうとるけど実際さっぱりなんやなあ〜この類の話し……）

服部が出るドラマは初回の視聴率がかなり好調だったらしくスタッフや共演者もかなり士気が上がっていた。撮影自体はもう僅かで彼自身の出演も山場に比べれば楽なのだが、台本が直前で差し替え。丁度訂正された箇所が服部の長ゼリフだったのだった。

（けど、男との恋愛が遊びだったオンナが意中の男と一晩寝ただけで、今までの自分に罪悪感を感じるなんてな……。ホンマに恋愛は理解の外やわ）

そんなことを考えながら悪友の工藤と、俳優仲間としてそして数少ない異性の親友の志保の今の関係を見るとやはり恋愛を「ヤヤコシイ」の一言で片づけるのは吝かではなかった……。

「あいつ等も早い内に年貢の納めどきにした方がええのに……」

どちらも真剣に思い遣り、そして想いあっているのだから・・・
尚更・・・

「・・・・アホくさ。やめやめこないな話、オレにはむかんは・・・」

さて、そろそろあの時間やなあ、仕度せなあと立ちあがった時男の携帯が鳴った。

着信…宮野のねえちゃん

「・・・・噂をすればやな・・・・、もしもし」

服部はこの着信を聞いて、もっと自分がお得意の無鉄砲さでお節介を焼いていれば、もしくは仲を取り持てばよかったのにと激しく後悔するのであった。

外は白い一面の雪化粧だ……この中で赤い華でも咲いたらさぞ綺麗だろうよ……

「……っうん……」

気がつけば、いつもの空間。白い空間だ。アイツ……真純と逢うときの……

遠目からシャワーの音が聴こえる……顔を少しずらせばさっきまで感じていた火傷しそうなほどの熱さを持ったあいつがいない。

ルーム内の間接照明のたまゆらな光に視線を合わせ、さっきまでのコトを巻き戻し再生していた。

いつも、積極的。オレを放さんとして必死にしがみつく……背中には今頃紅い線が丁度乾いたぐらいだろうか……。まるで、オレの上に自らを残し、更新していくように……

水音が止まり、控え目な物音がしてそのあとシャワールームの扉が開かれる。オレを悩ます、諸悪の根源が湯上りの香りを漂わせ再降臨……

視線がかち合う……相手は満面の笑みで身体を自分から寄せてくる。すり寄って顔をオレの胸に乗せる……まるで子犬だな……

ただ、こいつは一人が淋しく、不安で、どこか頼れる存在が欲しいからオレというだけ……。いい人が見つければその内、本当におさらばだろう……

両親のいないコイツにとってはあの売れない俳優が唯一の肉親……だから、家族を求めたがる節がある。こいつには妹以上の感情は湧かない……。でも、抱いた……。後ろめたさのある訳でもなくこいつの一途な思いを利用して……。どこかアイツに似ている空気を纏ったこいつを……

けど、そんな大人の浅薄な考えをこいつは見通しているに違いない……それでもこいつは益々離れない。

この罪は一体どうなるんだ……

雪の真ん中に真っ赤な緋色の薔薇が鮮やかに、艶やかに、儚く、咲いていた……

まるで、死にゆく自分への手向けのように……

その頃、建物の外は緊急車両の往来や人ばかりで騒然としていた……

無理もない杯戸シティホテルの屋上で若い女性が血まみれで発見されたのだ……

・ 女性の名前は、宮野志保……当代きつての若手実力派女優……

そう、工藤新一が今いるホテルの上だった・
・
・
・
・

Scene 2.0: 墮落 現状維持（後書き）

嗚呼ーやってしまった・・・科白むずかしい・・・世良ちゃん、ハ
ットリ難しい・・・

即席で作った自分にも恥ずかしい・・・

感想・批評・ご意見待ってマース・・・

Scene 3.0: チェーン・ディストラクション

黒羽快斗は愛車のminiを法定速度オーバー気味で疾走していた。服部から連絡をもらった時は丁度身重の彼女に見舞いへ行っていたところだった。雪も降り出し、いっしょにホワイトクリスマスを過ごせたら、”三人”で暮らせたらと思っていた。

そんな綿菓子のようなふわふわとした暖かなものはたった一つのテロップで霧散する……

何気なしに二人で病室に備え付けられていたバラエティ番組の再放送を見ていた。赤いポストから手紙が出てきて出演ゲストのプライベートな暴露話でしょうもなく盛り上がる番組……

一回、番宣がてら出演したのだがその時は散々あることないこと根掘り葉掘り聞かれ、唇の厚い司会者にやられた記憶がある……あの時色黒サムライのフォローが無ければ本当にヤバかった。

はぁーもうあの番組はいいよと思いつけんなりする思い半分、これに出演している人に同情半分で観ていた。すると、上に速報テロップが流れる。

―杯戸シティホテル屋上で血まみれになった女性が発見。女性
性は女優の宮野志保の可能性も―

正直、面喰った……まさかそんな馬鹿な……また件の奴に襲われてでもしたのだろうか？彼女は熱烈なファンもいて少々危ない輩が問題起こしに来たこともあったぐらいだ……

「……快斗、宮野さんってあの有名な……」

彼女が不安そうにオレの顔を窺うようにして云ってくる。

「……ははは、な訳ねえーだろー。志保ちゃんはお前よりしつかりしたオトナな女性だ。」

P i e c e t o P e a c e

S c e n e 3 . 0 … チェーン・ディストラクション

n d u c t i o n a n d a c c i d e n t

i

白馬探はその日、たまたま志保とオフの日が重なり久しぶりに食事でもしようと考えていた。寝起きのシャワーを浴びてダイニングに

降りる。今年で25にもなるがいまだに実家住まい。本音を言えば、稼ぎもある今独りで都内にマンションでも借りて独身貴族の自由な生活を享受したいところだ。

ただ、家の方針牽いてはこの”白馬家”の家訓コードが一重に探の思いを拒み自由を束縛している。自分の家の云われや立ち位置、それからの振る舞い・所作までもがまるで鎖につなぎとめられているような錯覚を与えていることは事実だった。

やはり自分は駒であり、傀儡であり、トロフィー置物にしか過ぎない。常に、感じるのは周囲からの目線・期待・ありもしない期待・根拠のない嫉み……

自分は、常にけだるげでやる気の無いでも芯がある作家兼脚本家の工藤や、茶目つけもあり人の気持ちに汲める黒羽だったり、冷静でそこにはユーモアも溢れウィットにさえも富んだ服部にも及ばない。

それは自らで自らの道を拓いた訳ではないからだ。そう、あの時も彼女の手を、拘束を自ら喰いちぎっても引っ張れば、違った、例えば今のような地位が無くとも自分の矜持に対して信念にたいして誇れるものが出来たのだろうか……

白馬は階段の中ほどで止まり首から下げたシルバーのロケットを開く。そこには、

幼き頃の探と紅く整った顔立ちの少女が顔を寄せ合ってお互いに子供らしい笑みを浮かべた姿が、生き生きと映っていた……

「紅子さん・・・・・・・・」

男の一言は宙を舞い、あてもなくそして結実することも無く消えた・

朝食も済ませ、地下の書齋にこもる前にメールを打つ。しかし、いつもの彼女なら返信にそうもかからないはずなのに今日に限っては中々来なかった。

その日、白馬に志保からであって志保ではない者からの連絡^{へんしん}があったのは夕刻になってからだだった・・・・・・・・

雪は止まることを知らない・・・まるで紅く穢れきつた所を覆い隠し何もなかったのようになる為に・・・

そして、これから死にゆく者への死化粧の様に・・・ただ白く白く丹念に塗りこんでゆく・・・

あれは、いつだったろうか・・・志保と初めて思いが通じ合ってその年の終わりに蔵王へ温泉旅行に行ったんだっけ・・・

その時、一面が真っ白で本当に綺麗だった・・・それでこう言っただんだよな、志保

「お前の肌って本当にキレーだよな・・・まるであの粉雪みたいによ・・・」

ってそしたらアイツはなんて云ったんだっけ・・・

「・・・馬鹿ね、私には白は似合わないわよ・・・」

「どうして?」

「ほら、なんか浮いちゃう気がして・・・私、底に沈んで埋没する方がいいし・・・」

「そんなにキレーなのに、逆に海底に眠った財宝の如く目立って掘り起こされるのがオチだな」

「それは、私があなたという売れない脚本家トレジャーハンターによって引き上げられたってこと？」

「そう、思ってもいいさ・・・けど、オレにとってお前は例えどんな輝きを放とうと放ちまいと唯一の無二の宝おんなだよ・・・」

「相変わらずくさいわね・・・そんな台詞ばかりいって結局作品には還元されていなのが残念だけど・・・」

二人で旅館の外から月夜の雪原を眺め、彼女の華奢な背中を後ろから優しく抱きしめる・・・顔は外に向けられて分からないが恐らく不敵な笑みを浮かべ、その輝く翡翠を聡明に輝かせていることだろう。

演じている顔とは違った、飾らない虚構でもない素直で、穏やかな笑顔が、オレにとっての真実がそこにはあった・・・

車の中で嘆息をする・・・メールの内容、着信履歴の数、その時間・・・

いや、もう息が詰まるぐらいのものだ・・・なんて言えればいいんだ・・・

オレは、逃げてばかりだ・・・結局は腰ぬけ腑抜けな情けない男だ・・・

彼女は聡明だ・・・運転中助席で虚空を見つめ腑抜けのオレに対してそっとしてくれていた・・・

ただ、車に乗って病院へ急いでいる最中・・・彼女はオレの背に向かって一言だけかすれた声で言った。

「ごめんなさい」

それは何に対してかはその時のオレには知る由もなかった。

杯戸中央病院緊急外来受付前

服部平次はまだ整理しきれていなかった。それに疑問を幾許か感じていた。何故、志保は自殺まがいのことをしなければならなかったのか？そもそもなぜ連絡が自分に来たのか？

そもそも鋭い洞察力を持っているにも関わらず理詰めでしかもその構成要素が増えたり、もしくは不確定要素があったりするとストレスが溜る性質だった。その為か、仲間内では長考するのが大の苦手という認識があったし、自らもそれをうすうす理解はしていた。

「ああああっオレがこないなことで悩んでもしやーないやん……
はあ……」

面倒くさそうに後頭部を掻く。そう、自分はいくまで第三者であり今回の件の当事者ではない。いつものように打算的に結論付けしてしまえばいいのに心のどこかではそれを許すことが出来ない……

色々と失くしてきた服部にしてはこれ以上の喪失は懲り懲りだった。喪失になれ心のどこかが欲するものや失うことに鈍麻した感覚は否めない……。けど、やはり欠けることの意味、痛み、遺されたものを斬るような痛みを知ってしまった自分にはどうしても耐えられない……

彼女の生い立ちを少なからず知っている自分としてはやはりあの二人が許せなかった……

だからだろうか……。連絡を入れたのは黒羽と工藤の母親だけだった……。あとは伝言ゲームなりなんなりで伝わるだろう……

すると、清潔感漂う白で統一された空間に最もふさわしくない、白いハンカチの上に存在する一点の黒点オトコが廊下を歩いていた……

「アンタ……。ねえちゃんの……」

「ああ、志保いもうとが世話になった……」

ニコチンと特有のコロンの匂いが漂う男……。赤井秀一……

久しぶりにこ顔を合わせる服部だがやはりその迸る殺気は並大抵の

モノではない・・・とりあえず、込み入った話も聞かれるのはま
ずいと思い屋上の喫煙スペースへと向かった。

「ホレ、それアンタの好きな銘柄やろ？」

「ホー、俺とあったのは数少ないはずだがよく知っていたな？」

「これでもアンタと同じ人を演じる商売や、人の観察には長けてい
る以上に職業病みたいなもんや・・・」

「・・・ツフそれもそうか・・・」

シガレットケースから煙草を一本出すとマッチを器用に出して擦り
火を点ける。一瞬だけ明るくなって映し出された表情は昔と変わら
ない怜悧で、厳かで、この世の全ての辛苦、闇を見て、悟ったよう
な横顔だった。

「煙草にコーヒーという組み合わせはあまり勧めんけどなあ・・・」

「・・・勧めたのは君だろう、それに身体は丈夫な方だからな・・・」

「いいや、アンタの健康のこともそうやけどニオイや・・・そんな
にキツいやつ吸ってそんな濃いやつ好んどったら寄ってくるモン
も・・・あっスマン・・・この話は・・・」

「いいんだ・・・もう済んだことだ・・・それにアイツも俺が縛ら
れていると勘違いするだろうさ・・・そういう人の心の揺れ幅や感

情の機微には人一倍敏感でもあったし、察しも良かったしな・・・」

「・・・・・・・・・・もう何年になるんや・・・」

服部は、虚空を見つめ昔を懐かしむよう目を細めた・・・それはただいい感情ではなく後悔や懺悔といった後ろ向きなものばかりだが・・・

「志保が大学入ったあたりだからもう7年だな・・・」

「時が経つんはホンマにあつという間やな・・・光陰矢のごとし・・・芭蕉さんがよういったもんや」

「・・・元典は李益の”光陰如箭”だろ・・・常に物事を疑う人間だったから観察眼は優れていたのだろう。故に普遍的な事象を当意即妙に表現出来たのだろうさ・・・」

「・・・・・・・・秀さん？」

「・・・・・・・・何だ？」

「・・・・・・・・もしオレがもっと疑り深い人物やったら・・・観察眼に優れた人間やったら今回のこともその前にあったことも全て見通すことができたんやろか・・・」

「・・・・・・・・時間の流れには主流とそこから派生する様々な分流へと

別れるが結局、自分たちが歩んでいる今の時間軸が主流にしか過ぎない・・・そこから先を見据えて進まなければならぬしだからといって分水嶺に戻ることも敵わない・・・なら、やることは分かるだろ・・・」

「どうやってこの先を考えるか？そういうことやろ？」

「・・・君も俺も捨て切れないものばかりで困るな・・・ともに荷物ばかりが重くて・・・」

「あああ、だからなんやろか・・・あいつら見てるとほっとけないんやな・・・」

「・・・ツフ、あいつ等もいい親友を持ったものだ・・・」

満月の夜、男たちはこれから先の見通し立たない流れをそっと見守ることにした・・・口で言わずとも互いに誓ったのだ・・・それでも言いたいことは積極的に云わしてもらおうけどなあ・・・というのが色黒男の弁だそうだが・・・

時は遡る・・・それはこの先の流れを見通す為には非常に重要なこと・・・

戻すことのできない、時計の針を、振り子を逆巻きにし戻ってみよう・・・

解決策があるのかもしれない、もしかしたら事実打ちひしがれて絶望すだけかもしれない

唯、そこにあるのは消すことのできない・・・真実・・・

さあ、因果の鎖を解き放て・・・さすれば道は開かれん・・・

今ある関係ではなく先を見据えろと・・・であれば切った
鎖も意味があるはずだ・・・

Scene 3.0: チェーン・ディストラクション (後書き)

まだまだ迷走中・・・

意味不明な言葉の連続・・・伏線の放置・・・

何とかしたいけど・・・こればかりは自分の力量次第・・・

遅くなりましたが、あけおめ&ことよろです・・・

本当にこんな作品を読んで頂きありがとうございます・・・

引き続き、感想・ご意見まってます!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9188z/>

Piece to Peace

2012年1月9日20時50分発行